

伝道  
ブックス  
87

誕生と往生

本多  
雅人

## 目次

■ 「誕生」っておめでたいですか？	1
■ 縁によって生まれる	3
■ 自我意識より深いところに	10
■ 七歩歩んだ世界	19
■ 「ありがとう」と言える人生	27
■ 自己満足と自体満足	33
■ 親鸞聖人が開いた「安心して迷える道」	38
■ 関係性の崩壊した現代	45
■ 人間の自我が破れて	53
■ 「如是我聞」の歴史・本願に生きる	62
■ 生きる力への転換「往生」	67
あとがき	74

【凡例】

・本文中の真宗聖典とは、東本願寺出版（真宗大谷派宗務所出版部）発行の『真宗聖典』を指します。

■「誕生」っておめでたいですか？

これから、「誕生と往生」について、尋ねていきたくと思います。まず「誕生」に関連して言えば、親鸞しんらん聖人の「誕生会たんじょうえ」を勤修ごんじゅうされているお寺というのはあまりないのではないかと思います。「花まつり」としてお釈迦様の誕生日は勤められますけれども、真宗門徒と言いながら親鸞聖人の御誕生の日を知らないご門徒も多いのではないのでしょうか。最近  
は、真宗門徒でも一番知っている偉大な宗教者の誕生日といったら、イエス・キリストではないでしょうか。十二月二十五日であると誰でも答えられるということは、これは一体どうということなのでしょうか。先

日、ある聞法会で「親鸞聖人の誕生日はいつでしょうか」と尋ねてみたら、皆さん下を向いておられました。史実としてはつきりしていませんが、親鸞聖人の御誕生の日は四月一日と言われています。

今日の講題を見てびっくりした方もおられると思います。「誕生」は一般的に言うとおめでたいことと思っけています。それから、「往生」というとなんとなく死ということが漂います。この相反する「誕生と往生」がどういことなのか、きちんと向き合っけていきたいと思うのです。

実は仏教の眼に照らすと、「誕生」ほど暗いものはないのです。「往生」が明るいのです。「往生」は「生まれ往く」と書きますから、「生まれる」ということに関係しています。この場合の「生まれる」とは私たちに何

を投げかけているのでしょうか。お寺に来て聞法するということは今までの自分のものさしが問われるということですから、何か大切な、それこそ人間の歴史の苦悩の中から生まれてきた仏教という教えに尋ねていかなければなりません。つまり「誕生って本当におめでたいですか？」という問題です。実は「誕生」という問題はけっしておめでたいものではないということす。逆に「往生」がとても明るいことなのです。そういうことをひとつお話ししてみたいと思います。

### ■縁によって生まれる

まず、「誕生」がなぜ暗いかということについて、今日は娘の誕生日

なのですが、朝から会っておりませんのでメールで「おめでとう」と書きました。やはり、生まれたことに対して「おめでとう」と言うのです。誕生したことを本当に喜べることに遭遇であった時に、「おめでとう」と言えるわけで、「往生」がそのことと関係しているのです。しかし、「往生」が死を連想させるイメージが強いですので、往生ということと、おめでたいということがなかなか繋がってこないのではないのでしょうか。

仏教の基本ですが、私たちのいのちの有り様というのは「生老病死」です。四苦しくともいいますが、これは生まれることが苦しみであり、老いていくことも苦しみ、病気になることも苦しみ、死んでいくことも苦しみだと。この老病死は苦しみというのはわかるのです。では、生ま

れることがどうして苦しみなのか、それは、自我じが分別ぶんべつをもって生まれてくるからです。オギャーと生まれた時は、純粹じゆんないのちの叫びですが、成長するにつれて、分別が顔を出してきます。分別する心は、自分にとって都合のいいものを受け入れ、都合の悪いものは受け入れられないという構造をもっています。生老病死といいますが、老病死は受け入れがたいものですから、老病死の苦しみは、生まれてくることの苦しみが根底こんになっっているのです。迷いをもって生まれてきたと言ってもいいでしょう。

また、生まれてくるといいますが、自ら選んで生まれてきた人は一人もいないのです。縁によって生まれたのです。ですから、まず親を選べ

ないでしょう。これは最初に有る人間関係が親ですから、人間関係の基本ですし、いいも悪いも引きずるわけです。親による影響力が大きいわけです。自分の顔も、親も選べないのです。

時代も選べません。もし私が大正、明治時代に生まれていたら、「お国のために」と、戦争に行った可能性が高いですね。戦争に行くことが善である時代です。今は、戦争をすることは悪ですね。時代によって、人間が立てた善悪がまったく違ってしまいうわけです。このように時代も選べないのです。また、日本人であることも選べませんね。

それで、親も時代も環境も選べない中で、私の場合は寺に生まれました。坊さんの家に生まれたのです。別に好んで生まれたわけではないの

です。ある時にはお寺のお坊ちゃんと言われて周りから持ち上げられたりもしました。天皇陛下とまったく同じ一九六〇年二月二十三日生まれるのですが、当時は、「浩宮様と一緒の跡継ぎさんで……」などと言われて、どういうわけか褒められたりしたわけです。ところが、ある程度成長していくと、友だちから「お寺は、人が死んだことをいいことにお金儲けしている」ということまで言われたのです。確かに人が亡くなるとお布施をいただきますから、なまじ反論できないこともありました。また、学校の先生から注意される時も、「お前の家、寺だろう。坊さんの息子のくせに」と言われたりもしました。

皆さんもサラリーマン家庭に生まれたとか、老舗しにせの家に生まれたとか、